
能力を知られてはいけない魔術師

皇杞 美弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

能力を知られてはいけない魔術師

【Nコード】

N9546U

【作者名】

皇杞 美弥

【あらすじ】

世界が二つに分割されて既に数百年経った時代。一つは科学を、もう一つは魔術を推進する国々はお互いにいがみ合い幾度となく戦争を繰り返していた。その中で、魔術推進国にある魔術育成学院の名門校である『王立魔術学院』では一人の不可認の魔術を持つ生徒が入学をした。文字通り相手には勿論、仲間さえ知られてはいけない能力を持つ男子生徒はどんな手を使ってでも知られることを阻止する。やがて戦火が学院にも舞い込み学院最強のクラスである『零クラス』や最弱である『参クラス』も参戦することになるのだっ

た。

第一話 入学前

西暦二三〇〇年。歴史史上、最悪とも呼べる戦争が勃発した。

後に『分割戦争』と呼ばれるようになる大戦は、文字通り世界を二つに分散させた。

一つは『科学』を推進させる国『イーヴァ』となり、もう一つは『魔術』を推進させる『エイヴァ』となり、互いにいがみ合いながら歴史は進んだ。

今もなお、戦争は続いており今日もまた何処かで罪もない人間が殺されていくのであった……。

魔術推進国『エイヴァ』。

文字通り、お伽噺や伝説に出て来る『魔術』という不可思議な攻撃手段を家事や戦争に組み込んでいる国だ。

そもそも魔術の発現が見られたのはもうかなり前の話だとされている。それが気にいられずに世界が二つに割られてしまったらしい。

そして、そんな国の中で最も大きな都市『ユグドラシル』には魔術を扱う人間の育成を目的とした教育設備が設けられていた。

『王立魔術学院』

それがその施設の名前だ。

エイヴァの中では魔術教育を目的とした学院は少なからず多い。その中でもこの『王立魔術学院』は特別な施設である。また『王立』というのはそれが理由でもある。

エイヴァ全体の中でも、最も才があると認められた者だけが入学

が可能なこの学院は、その中でもまた成績順にクラス判別をする。クラスは成績が上の順に『壹』、『貳』、『参』となる。そしてその中でも特に優秀な人間は『零』となる。

また、入学してからは完全寮制でありまた四人一組の小隊を作ることになっていて、責任は全体でまた魔術授業は全てが実技である。そのため、入学生の約二割は卒業することは不可だと言われている。

そして、そんな危険な学校に俺は入学をした。

否、してしまつた……。

「……はあ、本当に俺がこんな所に入学するのかよ」

俺は入学手続きを片手にボストンバックを持ち直して高さ五〇〇メートル以上、横幅四〇〇メートル以上の校舎を見上げ溜息をつく。正直、俺の魔術はこんな所には不向きな能力だ。それに、中学までは能力を卑下されたこともある。

いつそのこと、逃げ出しちまうか？ 今ならきつと間にあうだろう。何せ、此処には俺以外誰も

「そこ、邪魔なだけけど？ 早くどいてくれる？」

苛立つたような口調で、俺の肩にわざと当たり横を通り過ぎていく女子生徒。俺は絶句した。

すでに、俺は逃げ切れない、と……？

振り返ればそこには今日入学の生徒たちがちらほらと見えていた。

「い、いや……、きつと大丈夫。皆知らない人なんだ。だから」

「キミ、此処の生徒だろ？ 早く入らないと、殺されるよ？」

通りすがつた男子生徒に声をかけられる。そう、無理だ無理なのだ。何せ、制服は同じなのだから。

「腹を括るしかないのか……」

俺はしぶしぶ校門をくぐる。その時、背後から小さな悲鳴が聞こえた。

「キャッ」

「つと、痛いじゃねえーか。何処見て歩いてんだよ？」

「全くだぜ……、アレ？ この子意外と上玉じゃね？」

「ああ、結構いけるな。……、悪いな俺が邪魔だったみたいだ。それで、ホラ捕まれよ」

そこには、二人のむさ苦しい男子生徒と尻もちをついている可愛らしい女子生徒が見えた。

二人の男子生徒のうち、一人がその女子生徒に手を差し出す。だが、女子生徒はそれを握ることはせず一層警戒を高めた瞳でその手の平を睨みつけた。

「あ、あの、私は一人で立てますので……。その、すみませんです」

「おいおい、それだけで済まそうっての？ そりゃあ、当てられた俺に割が合わねえじゃんよお」

「それ、言ってる！ 良いから、俺達と行こうぜ？ 目的地は同じなんだからさあ！」

見ているだけで吐き気がするビジュアルだ。だが、それでも他の生徒は見て見ぬ振りをする。なぜならば、彼の制服が登校している生徒たちとは少し違うからだ。

色は他生徒とは変わらない黒で統一されているが、黄色の筋が刺繍されている。つまり、アレは『弐』クラスの生徒ということになる。

それに比べて、今登校している生徒たちは黒一色。『参』クラスなのだ。そして俺も、その黒一色である。

「……マンガみたいには上手く行かないよな」
ヒロインが助けを求める時、さっそうと登場する主人公。それは必ず、驚くべき強さですぐにその悪党どもを倒してしまう。

そんな主人公ポジションに憧れていた時もあったけど、段々と年齢が上がっていくにつれてそれがただの幻想だって気がつくのだ。

「やめて下さい……！ 謝りますから……！！」
「往生際がわりいんだよお！ 俺達を行こうぜ……！」

男子生徒たちはなかなか承諾をしない女子生徒に苛立ち始め、つ

いには手を掴む。

細く軽やかな女子生徒の腕は、しっかりと握られていて今にも折れてしまいそうな儚さだ。

「~~~~ツ!! もう、我慢ならねえ!」

俺はポストンバックを地面に置き、握りしめた拳圧でグシャグシヤになったガイドを捨て走りだす。

「「その手を離せ!!」」

その現場に駆け付け大声で叫ぶ。が、それは俺だけではなかった。俺と同時に出てきたのは、俺よりも少し背が高く美形の男子生徒だった。と同時に目が合う。

「……貴様も同じことを考えていたのか」

「あんだ、一体」

言いかけてとどまる。それはその生徒が腕に付けている帯を見たからだ。

「……『生徒会長』だった?」

目を見開いてその帯を見る。

生徒会長。知っている通り生徒を統括する代表的な生徒である。

だが、俺はそれに驚いた訳ではない。

現生徒会長は、歴代の生徒よりもずば抜けて天才だと聞いているからだ。

役所を全て一人でこなし、他の生徒がいると逆に邪魔になる『零』クラスの二年。

「……ふ、まあ良い。それよりも、だ。貴様らみたいに暴漢を働く生徒は此処にはいらないのだが……?」

「んだとツ!？」

「お前、誰だかしらねえけどこれを見て言ってるのか!？」

女子生徒の腕を離し、黄色い刺繍を指さす。忒クラスを意味しているのだろうが、残念ながらきつと生徒会長にとってはなんてこと

ないだろう。

周りを見れば、いつしか俺達を囲む野次馬が出来ていた。

「それがどうした？ 詰まらない見世物だな」

「んだとオ！？」

その中で、俺はすでに除外者扱いだ。

「早く此処から立ち去れ。さもなければ、この地面を永遠に踏みしめることが出来ない身体にするぞ……！」

「はぁ！？ なにいつて」

生徒会長はキツと睨みつける、するとピリピリと空気が振動し始める。

「……ッ。今は見逃しておいてやるっ！」

下っ端のような捨て台詞を吐きながら二人は急いで走り去った。

「……大丈夫か？」

「え……？ あ、はい」

「ちえっ、すでに俺は蚊帳の外だよ」

俺はその場から誰にも気づかれないうちに立ち去った。

「はあく。あんまり不慣れなことをするもんじゃないな」

ボソリと呟きながら参クラスへと向かう。因みに、上履きなんて無い。土足だ。

俺はボストンバックを右肩から左肩へ移す。その時、ボストンバックが何かに接触をした。

「っと、わりい当たっちゃったか？」

俺は謝りながら振り返る。するとそこには、つい先ほど暴漢を受けそうになっていた女子生徒が立っていた。

女子生徒は手の平を抑え少し痛そうにする。

「い、いえ。大丈夫です」

「って言ってもな。そう、痛そうにされちゃうと我慢が」

「い、いえいえ。その、私が悪いんです。私が声をかけようとして左肩を叩こうかと思っただら、丁度バックが移動してきちゃって……」
「あ、そうだったの……？　悪いな、気付かなくて。それで、何？　俺に何かようなの？」
女子生徒はモジモジと身体をはずかしそうに動かし頬を赤く染める。

「その、先ほどはありがとうございました……！」
「……は？」

勢いよく頭を下げられた。

えっと、俺って何かしましたっけ？

「その……、私を助けようとして来てくれて……」

「あ、ああそれね。でも、結局は傍観者になっちゃっただろ？　だから、俺は何も」

「い、いえ。その参クラスの貴方が弍クラスあの人達にああやることはなかなか出来ないと聞いています。それに、貴方以外は何もしてくれませんでしたし」

「はは。ま、ああいうのを見るのが嫌いなだけだよ。それに、魔術勝負になったら俺きつと死んでたし」

「……でも、尊敬しちゃいます。危険をかえりみず飛び出せる所」「そりゃありがと。っと、そろそろ行こうぜ？　遅刻しちまうからな」

にこやかに笑いかけ参クラスへと向かう。だが

「あ、その……。私は此処で」

「え？　だって参クラスは」

「私……、『零クラス』なので……」

俺は今日この日、初めて正義というのは辛いなと実感した。
なかなか上手いかないもんだな。こういうのは……。

第二話 鏡森 結華

見上げるくらいの高さの学院へ入り、一人の少女を助けるために見栄を張ってはみたが全て生徒会長様に持って行かれ拳句の果てに助けようとした少女が学院最強の『零クラス』。

何故だろうか、こんなにも疲れたのは……。

俺はついたばかりの教室を見渡し落胆の意味を持つ溜息を吐く。

因みに、この学院だと指定の制服はあるがバツクはない。つまり俺にとってポストンバツクがマイバツクなのだ。

「特別だかなんだか知らないけど……、適当にも程があるだろ」

学院内は土足だし、暴漢事件が起こりそうなのにそれを無視したり……。決まってるのは制服だけなのか？

それに

「魔術も使い放題なのか……」

俺が視線を向けた先には、ワイワイと新しく出来た友達に自らの魔術を自慢している生徒の姿が見えた。

元々はそんな簡単に魔術を使って良い訳ではない。どちらかという、罰せられる方だ。

「て言っても、俺にとっちゃ意味ないか」

俺の魔術は今は『使えない』からな。

「……………」

うわ、めっちゃ見られてるよ……。

そんなに黒髪黒目が珍しいかな……？

俺は自らの髪の毛をワサワサと触る。……決してナルシストとかではないぞ、断じて違うっ！

「……………ねえ君、君つてもしかしなくても日本人だよな？」

「へ？」

突然背後から声をかけられた。

『もしかしなくても』ってちょっと意味分らないけど

「ああ、一応は日本人だけど」
振り向きながら答える。

そこには、肩まである栗色の髪にクリツとした目が特徴的な女子生徒が立っていた。

「えっと……」

俺は言葉を失う。あ、案外可愛いじゃないか……。

「どうかした？ 人の顔をまじまじと見詰めちゃって」

「あ、ああいやなんでもない。それで、俺に何か……？」

「ま、ちよつとこつちに来なさい。話があるわ」

そう言ったかと思うと、少女は俺のサイズがあっていないダボダボの袖を掴み無理矢理廊下へ連れて行かれる。

俺、何かしたっけ……？ まあ、あの騒動には少しだけ関わってるけど。

「ここらへんでいいわね。君、名前は？」

少女は周りを気にしつつ尋ねる。

「俺？ 俺の名前は『鏡谷^{かがみや} 拓人^{たくと}』だけど君は一体」

「やっぱりっ！！」

俺が少女の名前を尋ね終わる前に少女は目をパツと輝かせ俺に飛びつく。

ふわりと軽やかにジャンプし体重を乗せて来るが重くはなくどちらかというと軽い。そして何よりも女の子らしい良い香りがする。

「んふふ〜 やっぱりタクなんだね〜」

甘える猫のように少女は俺の胸に頭を擦り付ける。その際、首にくすぐったさを感じられるが……、これが女の子が中途半端に切るのを嫌がる理由なのか。

つとそんな所じゃないっ！

「君は一体……、誰だ？」

「あ、そっか……。覚えてないんだね。私の名前は『鏡森^{かがみもり} 結華^{ゆいか}』だよ、タクお兄ちゃん」

「鏡……森……だって？」

まさか、そんなことって……。

それに『タクお兄ちゃん』って確か

「どうして此処にいるんだ？ 結華」

「えへへ。色々あったんだよ、お兄ちゃん」

「誤魔化さないっ！ それよりも……、分家の鏡森家がいるなら宗家の鏡谷家も」

「いないよお兄ちゃん。残念だけど、お兄ちゃんが知っている過去から何も変わってない、没落したままだよ」

俺は歯ぎしりがするまで奥歯を噛んだ。

やっぱりあのダメージは大きかったんだ……。

「……それとお兄ちゃん。黒髪黒目はやめた方が得策かもね……。

『元々』の国で嫌っていた所もあるみたいだから」

「元々って。今でもその国の風習が抜けない、とか？」

「うん。私たち日本人だって、ご飯を食べる時お箸を未だに使うでしょ？ それと同じ。黒髪黒目を嫌っている人間が少なからずいるってことを注意してね」

俺はその警告に無言で頷く。

国によつちや黒髪黒目は『死神』やら『災厄』などと言う言い伝えが残っている国もあった。だからさつき俺はあんなに注目されたのか……。

「あゝ、ごめん。それは違うよ」

結華は俺の思考を盗撮したかのように

「って待て！ さすがに今の思考は読めないだろ!？」

「ははっ。ごめんね、これは私の魔術だよ。『キヤン・シヨット思考盗撮』って言う一種の透視」

地味に怖い能力を持つてるな……。それに使い方によつちやほぼ最強になる。

「それで、今の事だけどね……。ほら、コレ見てよ」

「……？ 青い刺繍……？ じゃあまさか」

「そ、私は『壱クラス』なんだよねっ」

エツヘンと首を反らし腰に両手をあてる。

まさか結華が壱クラスだなんて……、だからあの時クラスの皆が注目をしていたのか。

「お兄ちゃんはまだ『参クラス』何だろうけど、あの能力があればだれよりも強くなれるよ　もしかしたら、世界征服も……」

「こら、調子に乗るな」

俺はポカリと軽く頭をゲンコツで叩いてやった。

その時、静電気に似た感覚が脳を直撃する。まあ、いつものことだからもう慣れたけど。

「むうー、嘘だよ嘘お。別にお兄ちゃんのためなら何だってするの……」

「何か言ったか？」

「なんでもないですうー、それよりも気をつけてねお兄ちゃん。いざって時は私が命をかけても守るから……！！」

妹みたいな存在に『守る』なんて言われる男の心情、案外辛いんだな。

ま、現状じゃあしょうがないか。

「つと、じゃあ教室に戻るね。放課後会いに行くね」

パチツとウインクを俺にかますとそのまま走って壱クラスの方へ行ってしまった。

「つたく、昔とほとんど変わらないな……」

宗家に居たころも、あんな感じだった。

もし、まだ没落してなかったら今頃どうなってたかな。俺はきつと皆で

俺はそこまで考えると頭を振り脳を揺らし考えを無理矢理消す。

「さて、俺もそろそろ……」

俺が来た道に戻ろうとしたその時、校舎が光りだす。

いや……、校舎だけじゃない。校舎を含めた『敷地全て』だ。

ガラスから外を見ると、校舎を含めた大地がきらびやかに光りだす。そして徐々に景色が変わり始めた。

「…………どうなってるんだ？」
一度強く発光したかと思えば、その光が収まる頃には景色が一変していた。

今日は入学初日ということもあり、説明だけで終わった。

景色はというと、未だに一変したままである。どのように変わったかというと、白で統一されていた学院が黒に統一され所々金色の筋が通っている高級感あふれる建物に変化し、中もまた然^{しか}り。そんな一変変わった景色の中、俺と結華は寮に一緒に向かっていた。

「簡単に言えば、これは結界の中って言うことなんだな」

「そだねお兄ちゃん。この学院は実戦するんだから外にその影響を与えちゃいけないってことだね」

俺と結華は今朝に話されたことを二人でまとめながら話していた。

「なんかやりにくいな。校舎内まで変えられると…………」

「だね。トイレの場所も変わるっていうから。女の子の意見としては辛い一方だよ」

「なるほどな。確かに女の子にとっちゃ厳しいな。着替え途中とかに変わられちゃ覗きも何もないからな」

ふむ…………、少し狙ってみようか

「ダメだよ、お兄ちゃん…………？」

「さすが『思考盗撮』」

「でも、でもでも…………。お兄ちゃんが欲求不満っていうなら、妹である私がその処理を」

「女の子がそんなことを言つもんじゃありません!」

ポカッ

「あう…………、ごめんなさい」

全く、暴走具合も変わってないな。

でもま、そう言うのを含めて結華なんだけどな。

「……でもお兄ちゃんがいて良かったよ」

「それは俺もだ。見知った人がいないと、俺も不安だな」

「……そういう意味で言ったんじゃないんだけどなあ」

「……？ 何か言ったか？」

何故か不服そうな結華。

俺が目を向けると、ジト目で俺を見つめ返してきた。

「ほんと、そう言うところが憎たらしいよね。お兄ちゃんって」

「……、とりあえず俺はがっかりした方がいいのか？」

その質問には答えず結華はプイツとそっぽを向いて先に歩き出す。

何故だろう……。こんなに怒っているのは？ アレか？ 思春期

とか女の子特有の日だからか？ どちらにせよ女の子はムズかしい

って奴か……。

俺はそんな結華の後ろを駆け足で近付き隣りで一緒に歩いて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9546u/>

能力を知られてはいけない魔術師

2011年7月18日03時30分発行